

教師の
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

子どもの気持ちになりきった
我慢のさせ方

今回のテーマは、「子どもの気持ちになりきった我慢のさせ方」です。

タイトルを読むと「？」と思われるでしょう。子どもの気持ちになりきるといえることは要望を受け入れるということ。言い換えると我慢をさせないということです。

要望を受け入れて我慢をさせる、矛盾していると思われるのは当然です。とにかく、しばらくお付き合いください。

1 気づく前に先手を打つ

「雨が雪に変わったなあ」
肌寒い2月の1時間目。とうとう冷雨が雪になりました。

子どもたちは算数のテストに集中しているのでそれに気づきません。千葉県では雪が降ることは稀ですから、もし気づけば、「あっ、雪だ！」と叫び声が上がリ、皆が窓際に殺到することでしょう。

雪はますます強く降ってきます。子どもたちが気づくのははや時間の問題です。

Q1 彼らにどんな対応をしますか。

- ① テストを続行する。
- ② 気づく前に雪が降ってきたことを教える。
- ③ 気づいて騒ぎそうになったら、「テスト中」と諫める。
- ④ テストを中断して雪遊びをする。

①は先を読めない判断です。

子どもたちは雪が降っていることに気づきません。その時にどんな状態になるか想像するといでしょう。パニックとまではいきませんが、騒然となることは間違いなしです。

教師が「静かに」「テスト中ですよ」と子どもたちを鎮めようとしても、その声は歓声にかき消され、空しく教室に響くだけです。

言うことを聞かない子どもたちに教師は苛立ち、さらに大きな声を出します。

「静かにしなさい！」

この後は教師の説教です。

③は手遅れです。一人が気づいたということは、やがて全員が知るようになります。

子どもたちが雪に見入ったり、歓声を上げたりしている中で、教師が「テスト中」と諫めても効果はありません。言うことを聞かない子どもたちに教師は怒り心頭に発することでしょう。

④は子どもにとっては願ったり叶ったり。「先生、大好き」と喜ばれるでしょう。子どもの心情を察すればそうしてやりたいのは山々です。

しかし、テストは途中になってしまいます。それを放り出して遊んでも、テストの時間を再度確保する必要があります。

その時間内でテストを終わらせることが子どもにとっても教師にとってもベストの選択です。

②は子どもの心理に寄り添った判断です。テスト中の子どもたちに言います。

「テストを机の中にしまいましょう」

子どもたちは、怪訝そうな顔をしながらテストを机の中にしまいます。次にどんな指示が出るのかと教師に注目します。まだ雪に気づきません。

「どうぞ」のポーズ、黙って掌を窓に向けます。子どもたちの視線が窓際に移動します。

「あっ、雪だ！」

「本当だ。雪だ。天気予報通りだ！」

身を乗り出して口々に叫びます。本当は窓際に駆け寄りたいたいはず。テスト中という「たが」がそれを我慢させます。なんといいらしいことでしょう。

「雪を見たいでしょう。テスト中だけ大サービス。1分間だけ席を離れてもいいですよ」

意外な指示に子どもたちの顔がパツと明るくなります。窓際に駆け寄る子、立ち上がる子、座ったまま雪を見る子と三者三様です。

15秒ほどすると教室に変化が生じます。一人の子どもが窓際から自席に戻ると、それに続く子どもが出てきます。立ち上がった子どもは椅子に座ります。席に着いていた子どもは机の中からテストを出そうとします。「サービスタイム」は1分ですが、時間を余して子どもたちは「雪見」に満足しようです。

「まだ1分経っていないけど、満足しましたか」

「ハイ」

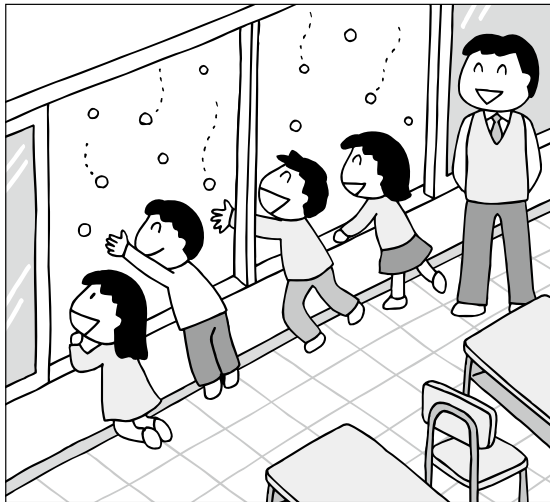
「さすが、立派です。時間を余して満足する。これが『大人』です」

テスト再開です。先ほどの興奮が嘘のような静寂さです。もう誰も雪を気にしません。

ちよつと遊んでみました。

「あれ、さっきよりも(雪が)降ってきたよ」

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？



窓際に駆け寄り子どもは皆無です。それどころか、声も上げません。ちらっと外に視線を移し、雪の降りが強くなったことを確認するだけです。

「先生、うるさいよ」

「先生、テスト中。気が散るでしょう」

子どもに叱られてしまいました。

テストが終わりました。雪はまだ降っていません。子どもたちは窓際に集まり、「積もるね」「雪遊びができるね」「雪遊びで濡れてもいいように」着替えを持ってきてよかったね」と口々に喜びを表します。

私が窓際に近づくと、「先生、さっきはテスト中だったのに雪を見せてくれてありがとう」と礼を言われました。

気づく前に先手を打つと、子どもは満たされ、教師は感謝されます。教師も子どもも皆が幸せになります。

2 見たいのなら見せてあげよう

6年生を送る会の出し物は、朗読劇「走れメロス」です。体育館のステージでは役を演じる係（役者）、ステージ下には朗読担当、ステージの袖には楽器の演奏担当が待機します。

練習期間の前半はそれぞれが分かれて取り組み、今日が初めての合同練習です。

練習を始めると、朗読担当の子どもの態度が気になります。彼らの背後で役者が演じています。それをチラチラと見るのです。今まで別々に練習をしていたので、背後でどんな演技をしているのが気になるのです。「見たい」と思うのは当然でしょう。

Q2

彼らにどんな対応をしますか。

- ① 我慢させる。
- ② 別々に披露し合う。
- ③ ご対面形式にして互いに演じる。

①「は子どもたちのストレスを高じさせるだけです。注意した時は後ろを向かなくなりませんが、「見たい」という思いは残ったままです。そんな状態で練習を続けられ、気もそぞろになり、自分の担当が疎かになります。上手く朗読できないことで教師の注意を受けます。それを真摯に聞けず、曲解することにもなります。

また、教師の目を盗んで見てやるうという不屈きな気分がさせてしまいます。子どもの悪さを教師が作るようになります。

②「は効果的な方法ですが、わざわざそんな時間を取ることは無駄です。肝心なことは見

たい」という気持ちを満足させることです。

③「がお勧めです。

教師のお墨付きをもらって演技を見られます。一度見てしまえば全体の流れがわかります。今までは演技をイメージできずに朗読していました。ですから、適切な間や抑揚を考慮できませんでした。演技を見ることによって、朗読と演技のタイミングをイメージできます。

目に見えないことでもイメージを鮮明に思い浮かべることができれば、人は安心します。頭の中で映像を描けるからです。それが具体的にあればあるほど安心度は増します。

2回目の通し練習時に、「気になる人は振り返りませぬ。矜持きようじがそれを許さないのですよ。練習の意欲が高まります。

卒業式の練習でも似たようなことがあります。卒業生が会場に入場する際、在校生は拍手で迎えます。最初の練習時に、「6年生の入場が気になるでしょう。だから、のぞき込んだり立ち上がったたりして拍手をしてもいいよ。でも、本番では（満足したのだから）『拍手』に集中だよ」と約束しました。子どもたちは見事に約束を守ってくれました。

人は「やるな」と制止されると、余計にやりたくなるものです。逆に「やれ」と強制されると「やるもんか」と開き直りたくなります。人は命令・指示されたことは拒否したくなるものです。しかし、受け入れられ、承認されると満足し、従順になります。期待に応えようとします。感謝する気持ちが芽生えます。